

## 仏法中怨の責をのがれるため

### 〈第六問答〉

研究所員 望 月 省 一

第六問答の大意は、第五問答において主人は法然の『選択集』が近年の災難の原因であるとし、その理由を説いている。それに對し客は、その時代の仏教が誤っているにせよ、それを正すのは、しかるべき地位にあり職分をもつ人がやるべきではないか。汝（主人）のように、一介の僧にすぎない者が、そのような事を言うのは自分の身分をわきまえないことではないか。一仏教徒として政府に向かって書面を出して諫暁におよぶのは前例のない暴挙ではないか、という問いを出すのである。これに對して主人は、『涅槃經』の壽命品の文を使って説き、また前例がないという問いに對して、延曆寺等が念仏停止の上奏書を朝廷にたてまつった事を示して答えている。

この『涅槃經』壽命品の文に「法を壞る者を見て、置て叮責し驅遣し拳処せざれば、当に知るべし、仏法の中の怨なり」と説かれていることは、日蓮聖人の生涯にわたる一貫した姿勢である折伏を支える。折伏の弘通はまさしく法を壞る者、同じく『涅槃經』が詮顯する「にせ者の持律比丘」や「如来の深密の要義を滅除させる悪比丘」や「邪教の悪知識」を呵責し追放し、罪惡を糾弾することである。ここに正法に違背する破折の対象と破折の方法が示される。「此文の中に

見壞法者の見と、置不呵責の置とを、能々心腑に染むべき也。法華經の敵を見ながら置いてせめんば、師檀ともに無間地獄は疑ひなかるべし」(定一二五四頁)と弟子・檀越にもこのことをすすめ、遺誠である「仏法の中の怨」を免れんとする姿勢を堅持したのである。このように、浄土教が『法華經』に帰結される教主釈尊の真意を遮断していることを批判し、法然の『選択集』の主張を糾弾するのであるが、これは日蓮聖人が国土の危機を憂い、その危機の根本原因は教主釈尊の末法救済の誓願が遮断されているためであるとし、その悪法を糾明することが不可決であるとされたからである。これは、『涅槃經』による仏法中怨をもってして、徹底的に念仏批判をしたのが、第六問答のポイントになっていると思う。